

文部時報

第1084号

昭和42年11月

日本文化について 浦松佐美太郎 2

〔座談会〕

「芸術文化の振興」…………… 7

(出席者)・安達健二・宮沢純一・栗原一登
・寺中作雄・河北倫明

(司会)・鹿海信也

文化財保護思想の普及

——文化財保護強調週間にあたって—— 坂元 正典 35

芸術祭二十年 土生 武則 41

映画フィルム of 保存と活用 鹿海 信也 47

著作権条約の新しい展開

——ストックホルム

知的所有権会議から—— 佐野文一郎 62

明治百年とユネスコ 朝吹 三吉 67

国立劇場一年間のあゆみ 寺中 作雄 71

〔紹介〕 高等学校における

職業教育の多様化について(答申) 望月哲太郎 77

〔随想〕 随想二題……………佐藤 知雄 80

〔教育用語〕 「著作権」とは 加戸 守行 52

〔現場の教育問題〕

「特殊教育の諸問題」寄稿……………小椋 義久 58

解説……………松原 隆三 59

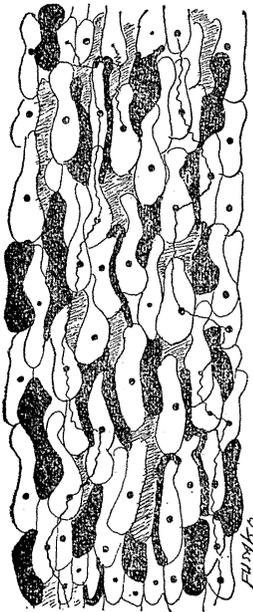
〔連載第四回〕

人物を中心とした青森県教育郷土史

……………苦米地武男 85

文部省の会議・行事等から…………… 54

文部省重要通達一覧…………… 95



芸術文化の振興

出 席 者	安 達	宮 沢	栗 原	寺 中	河 北	鹿 海
(発言順・敬称略)	健 二 (文部省文化局長)	縦 一 (東京芸術大学講師)	一 登 (日本児童演劇協会会長)	作 雄 (国立劇場理事)	倫 明 (国立近代美術館次長)	信 也 (文部省文化局文化課長)

司会(鹿海) 文部省の所掌事務としては、ご承知のように教育、学術、文化ということが、文部省設置法にうたわれております。これまで教育関係と学術関係は機構が整備されておりましたが、芸術文化の振興ということについては、非常に弱い体制であったということ、芸術文化各界の強い要望もあり、昨年文部省に文化局が設置されました。文化局の設置は、芸術文化の振興ということを特に期待されてきたように思います。

そういうことで、文化局ができたいきさつ等について、安達局長からお話しいただければと思います。

文化局の新設

安達 いまお話があったように、文部省は教育、学術、文化の三つの大きな柱なんですけれども、そのうちで教育には初等、中等、あるいは大学、あるいは体育とか、そういういろいろな面での部局が多いのですが、文化につきましては社会教育局に芸術課という課だけでした。

フランスやソ連などでは文化省というような、一つの省を設けているところもある。あ

るいは日本が文化国家というような旗じるしをしていのに、それを扱う役所の機構があまりにも貧弱ではないかというようなことで、四十年ごろでしたか芸術家の人たちの集まったところで、当時の佐藤総理大臣が、文部省に文化局を設けるべきだとの発言があったりして、それからだんだんと機運がもちあがりまして、昨年の五月に従来の調査局を廃止して、新しく文化局を設けるということになりました。従来、芸術文化について、芸術課だけだったものを二課にいたしまして、文化課と芸術課という二つの課に改変したわけでございます。

それと同時に文化に関係のある著作権とか、国語であるとか、あるいは国際文化、あるいは宗務というようなものをまとめまして、六課で文化局という新しい局をつくったということでございます。

役所の機構が大きくなった、あるいは整備されたからといって、直ちに文化行政が推進するということ、必然的な関係はないにいたしましても、やはり一つの局ができて、そこで基本的にこれに取り組むという体制ができて、それなりの成果が期待されるというものは、この一年四か月はかりの間にそういう

当考えられている。

そういう施設ができると、その中味を豊かにするためにそれに予算が伴う。当然そのためには係りも充実しなければならぬということとで、最近、芸術文化にいろいろな面から日が当たってきているということですね。

安達 いま話の出ました文化会館をつくるということ、非常にいいことだと思えますね。人口十万以上ぐらいの市は少なくともそういうものを持つべきだと思えます。人口十万以上の市が全国で百三十七ぐらいあるんですが、そのうちでいまいわれる文化会館といわれるものを持っているのが、七十七です。市が建てたものが六十七、県立であるけれども市内にあるというものが十で、七十七ほど



安達 健二氏

面での成果もあがってきているとは思いますが、今後各方面のお話を伺って、この文化局設置の趣旨に従ってさらにいっそうの努力をしてまいりたいと思っているわけです。

司会 これまで地方では教育委員会の社会教育課の中の、また片隅で扱われていた芸術文化行政というものが、国が文化局をつくったとなると、少なくとも係か、課をつくらなくてはという風潮が急激に出てきたようで、兵庫県でも昨年からは同じく文化課というのをつくっております。そのほかにも若干そういう動き、ことに係を置くというようにところが相当地出てきております。

地方においてもそういう動きがあるので、この際、中央地方を問わず何か役所に期待するようなこと、示唆を与えるようなことも伺えればと思います。

宮沢 率直に言って文化局ができるのが、むしろおそくくらいじゃなかったかと思えますね。ソ連などは文化省を持っていますし、イタリアのように観光文化省という形をとっているところもあり、みな相当な予算を持って、芸術文化の振興だけでなく、いわば、国威宣揚のために、相当大がかりなこともあえてやっています。日本はいままでそういうこ

あります。まだつくっていない市が六十ぐらいあるわけです。今年度からそういう文化会館をつくるための補助金というものを出しまして、その設置を促進しているところです。もちろん、国の補助金はそうたくさんはないんですが、地方公共団体としてはやる以上はということ、経費も数億円かけています。それはだいたい音楽堂、劇場のようなそういう面と、美術作品を展示する機能の二つを持ったものとして、今後そういうものをどんどん設置できるようにしたいと思います。

外国の芸術文化行政

司会 外国ではそのような点はいかがでし



宮沢 縦一氏

とはほとんどやられない状態でした。文化国家ということばは終戦直後から聞いているけれど、実際問題としていまやっとう文化局ができたような状態です。さきほど局長もいわれていたように、まだできたで、予算その他いろいろの面でじゅうぶんとは思えない。しかし、それにもかかわらず地方にそれだけの影響を及ぼしただけでなく、かなりいろいろやられたと思うんです。だから、これからさらに予算がとれば、いっそういい仕事ができるんじゃないかと、大いに期待しているわけです。

栗原 課長がいま兵庫のことをおっしゃいましたが、そのほかのそういう動きはどうですか。

司会 予算が急激に伸びてきたといえますね。ただ、ほかの学校教育、社会教育のように組織的なものと違って、芸術文化の振興ですからやるにこしたことはないという考え方があって、ことしの各県の予算をみても、六十から二千五百万までの非常に開きがある。しかし国に国立劇場ができる、地方にも文化会館が急激に整備されてきた。今度は近代美術館が新築移転していったものになりますけれども、地方でも美術館の整備が相

ようか。

寺中 フランスは文化立国といいますが、ご承知のようにフランスは物産が豊かだとか、特別な工業が盛んだとかいうことがあるわけじゃないんで、地勢からいっても産業的にはたいしたことはない。やはり、文化で外国から人も集め、そしてりっぱな文化をつくることを世界に宣揚するということか、あるいはそれである程度国の収入をはかるとかいうような気持ちは、非常に強いんですね。政府でもそういうことに最大の重点を置いているということが、非常に感じられるんです。いまお話し、地方の文化会館のお話もありますが、たとえばオペラその他の国立劇場、これはみんな五つぐらいあって、直轄のものは三つです。七割五分ぐらい国から補助してあります。ぼくがいたころにちょっと調べたのは、だいたい日本の金にして二十億の総経費に対して、国が十五億出して、あとの五億が入場料収入になっています。その補助率七割五分というのはいまもその率ですよ。それからドイツのオペラも偶然に七割五分の補助になってるんです。やはり演劇というものは、ほんとうのりっぱな演劇をやろうと思えば金がかかるんですよ。商業ベースでやって

いたらできないんです。だからほんとうの純粹な、りっぱな演劇をつくるためには、國が全面的に援助するというでなければ、ほんとうの演劇にならないということにもなるのでしょ。それからいまの十五億補助金の大部分の経費は、主として俳優その他芸能人の年金に使われるのです。フランス等では俳優たちが隠退した時の月給をそのままずっと死ぬまで出すんです。そういうふうには文化人を非常に大事にしています。

そのほか、カンヌの映画祭にしても、あのいなかへもって行って、ものすごくりっぱな國營の劇場を建てて、世界中の映画を集めて、そこへ世界中の映画人が集まる。何と云ってもカンヌの映画祭といったら、ほかの國でも最近映画祭をやりますが、やっぱり一番古くて、一番権威があるんじゃないですか、そういう意味では映画では世界をリードしているというふうなところがある。

日本の文化局はたいへんけっこうですが、やっぱり政府が、ほんとうに文化立國をやるんだという気持ちでやってもらわないと、形式的に文化会館をつくっておけばなんとかなるんだろというんじや駄目だと思います。文化というのはいつも後回しにされがちで、

基礎が、非常に強くなっているんじゃないでしようかね。

宮沢 そのことと関連すると思うんですけど、あのウィーンの国立オペラハウスは、戦争で焼けましたが、戦後ものがない、食べ物も着るものも不自由な時代に、ウィーンの人たちは手弁当で、品物を持っている人は品物を、何も出せない人は劇場の焼けあとの瓦礫をかたづけする勤勞奉仕をして、國や市とともに、あの劇場再建に力を入れたんですね。いまいわれたように、民衆の中にもそういうようなものがあるということは、それも察しられると思うんです。

それからもう一つ、いま寺中さんがいわれていたことに関連するが、國の考え方が違う



栗原一登氏

文部省でも教育、學術が主で、まあ少し金でも余ったら文化へまわそうかというような感じでしょう。どうしてもそうなりがちなんです。日本もフランスも文化で立たなければだめだという事情は、多少似ているんじゃないかと思うので、この勢いを利用して大いに文化のために金を使ってもらうという体制をつくっていくべきだと思うのです。その意味では文化局と同時に文化振興の組織、たとえば國際文化振興会というような組織についても大いに關心を払う必要があります。日本の國際文化振興会はやはり予算がなくてあまり活発にやっていないと思うのですが、フランスでもこれと似た組織があって、相当な予算をもって、非常に活発に動いています。

これは民間組織のような組織をよそおって、實際は政府自身がやっているんですよ。つまり、文化省と外務省が一体になってやっています。芸術局長というような人が、たいへんな勢力を持っていて、この組織を主宰しています。金なんか組織が実に融通無碍に、そうむずかしく監督しないで、簡単に使えるようになっていて、お金を使うこともある程度。たとえばフランスが日本から田中耕太郎さんのよ

というのは、民衆がそうだから國のほうもそうなるのかもしれない。とにかく、欧米のオペラハウスのおもなところは、もちろん、人口五万、十万人ぐらいの都市のオペラハウスも、つとめて歩いてみたが、たとえば人口数万のイタリアピサだとか、そういうような町でも、みんな町の真中にオペラハウスがデンとあるのです。イタリアでは、オペラハウスは国立劇場じゃないんですが、觀光文化省が、イタリアのオペラが外国人を呼ぶのに大きな役割をはたしているのを知っているから、たとえばミラノのスカラ座とか、ローマの歌劇場というような主なところやそれに次ぐフィレンツェや、ボローニヤやベニスなど十ぐらいの代表的な歌劇場には、國家から助



寺中作雄氏

うな人を國賓として、招へいた時、その経費は國際文化振興会がもつことになるわけですが、別にむずかしい手続きなしに会計課長に当たる人が、どんどん即金で必要な金を払ってくれます。ただ、泊めて旅行させてというだけではなくて、田中先生がお使いになるごつかいまで出してくれる。そのお金の交渉に行ったとき「ぼくは一日五千円くらいでいいでしょう」といったのですが、向こうがそれでは足りないでしょう、田中先生の親しい友だちを呼んでお客をすることもあるでしょうからといって一日分二万円ぐらいポンと出してくれました。ちょっと日本とフランスでは考え方が違うようです。

文化的基盤と欧米の事情

栗原 考え方が違う一つの基盤というのは、民衆の中の文化に対する考え方の違いというのがあるんじゃないでしようかね。たとえばフランスの場合なんか、カンリックの文化運動、芸術運動というのは、相当な勢力で民衆の中にはいっていますね。だから、たとえば文化会館ふうなものをつくらるとなるとそれが自分たち一般の要求といったふうな成金とか、補助金を出している。またあの劇場にはその都市がみんな金を出しています。だからベサロのロッシニ劇場とか、そのクラスでも、やはり町が金を出してやっている。

劇場についてさらに少しお話しさせていただけば、國によっていろいろな形がとられていくわけですね。たとえばユーゴスラビアや東歐諸國は、一般に文化省直屬というか、文化省が劇場をいっさい握っている。

ところがフランスの場合は、寺中さんもご存じのように、パリのオペラコミックとオペラ座、あるいはコメディ・フランスセーズというふうなところは、みんな国立劇場として國が経済的にめんどうはみるが、共産圏のいくつかの國のように、上演内容まで、そこそこまかく干渉はしない。またフランスといわず、ソ連その他アーティストが官公吏のところも多い。それから合唱、管弦楽団などは、イタリアのようにシーズンの短かく、毎日公演しないところでも、コーラスに十三か月分の給料をやっている。だからコーラスは実際には、五、六か月働いただけだけれど、十三か月分の給料をもらって生活が保障されているから、じっくり勉強もできるわけですね。

の町の人は「小さな町だが、大きな文化」とそれを誇りにしている。それに対して国も町もその育成に努めている。東京は無関心か、批判か、悪口か、ガヤガヤいうが、うまくいかない。しかも、その東京が文化のセンターで、何もかもが東京に集まっているからますます難かしい。

河北 東京の場合は、芸術文化の問題だけじゃないでしょう。東京という都市の性格にそういう問題があるからですよ。地方文化熱成というような観点からでは、ちょっとと東京の場合はつかみにくいんじゃないですか。

宮沢 むろん、地方文化という観点でなく、日本の芸術の振興という意味で、地方に影響の大きい東京というところがたとえばNHKと、東京都、文部省その他が協力して、何かできないものかということですよ。協力でなく、批判が多く、万事やりにくく、ややこしいと思うんです。それぞれ相互に何ら関係はないんですね。あちこちで出す金と一緒に集めて何かやれば、かなり大がかりないいこともできるんじゃないか。ぼくは前に外国で東京にはテレビ局が六つあるといっただけですよ。そうしたら、しろうとはみんな「すごい、さすがは世界一の大都市だ」と感心する

をごまかそうとすれば、そんなことは容易なことだということにもなる。俳優は自分もらっているものを、お互いに口外しない。お互いに、自分の方が彼らより多いのだと思っ

ているし、そう思わせておくためには書面に書いたものを渡したりするのは困るんだね。また俳優の下っぱと大名人の人氣役者とは給料の關係が百倍ぐらい違うのですよ。いわゆる三階者は非常に待遇が悪いから、結局、変なことで金を要求することになる。たとえば芝居で、びんたをはることがありますね。そうすると舞台のうしろでピシャツとやる者がいるでしょう。そうすると一たたき五千円とか、また、親分の役者が早ごしらえで出るとき舞台のかけでいろいろその世話をしてやる。そうするとその手伝い賃が一万円だとかいうようにして、それは給料以外に勘定書に書き出して、明日暮を開けるという日の前日に興行師に要求するんですよ。それを「さばき」といっています、そのさばき料がだいたい七、八十万円から、百万円ぐらいになる。これだけ払ってくれないければあしたからの舞台は勤めないという、びっくりするでしょう。ところが、これは興行主の方ではだいたい五分の一ぐらいに値切って払ってやるので

んです。ところが専門家たちは「何で六つもあるんだ、いったい、どんなことをやっているんだ、そんなムダなことをやめてせいぜい二つぐらいにして、そこに金を集中したら、いい番組ができるんじゃないか」といわれましたよ。

河北 だいたい、ヨーロッパ地区だと、少ないですね。

宮沢 テレビが六つあったり、一つの町に交響楽団が……。

国立劇場への期待

河北 国立劇場はでき上がりましたが、今後の運営がたいへんでしょう。

宮沢 それはつくることより、つくってからが問題だといったことにつきましますよ。建物を建てることはそれほどのことじゃない。近代文学館だってぼくはそうだと思う。寺中 いままで興行形態の中からは半ぶりがないと言っていますよ。

栗原 それは私には非常によくわかるんですよ。日本の興行界というのはどちらかというと、どんぶり勘定的なことになっている。そういうふうなものともう一つは国がつくっ

す。その金を渡すと、連中は「旦那恐れ入りました」ということになって仕事をやる。そういうようなことを許してきておるものから、芝居そのものだってほんとうに身を入れて芸をみがくというような気持ちはないんですよ。とにかく舞台に出ているだけでよい。さっき宮沢さんが、向こうではシーズンというものがあって、シーズンに働いて、働かない時も金をくれる。だからその間に非常に勉強やけいこができるということだった。日本、日本の役者はそんなことをしたらだめですね。何でもいいたただ出してもらえばいい。けいこをすれば、自分のわざを練習するとかいうひまもなければ、気持ちもないんです。月給制で一か月交代で、チームを二つ、三つ持っていて一か月はけいこをし、次の月に舞台に出るといふふうにするのが、ほんとうはいいと思うのだけれども、一か月休ませたら日本の役者はだらけちゃってだめですよ。ただ出て、パチンとやったらいくらというふうなことが考えているのですから。とにかくおくれていますよ。幹部役者は幹部俳優で、相当の金をもらって、まわりの者に威勢よくチップを切る。この散り銭というのがなかなかばかにならないという

たというので、官僚的な規約とか、しきたりとか、そういうものが今度は国立劇場の中までのしかかってきている。その間に寺中さんがはさまっていらっしやるんじゃないかと思えます。だから、ほんとうにこれは国の劇場だということから、その中味がほんとうに国の芸術のいいものを起こしていく場だという認識を、当局自身もしないと、どんな有能な方が国立劇場にはいっていても、あの運営というのは困難でしょうね。それと、劇場の労働者が当面している、たとえば残業の問題とか、時間外の問題とか……。それらの問題は従来の役所の問題とはかけ離れている。それが今度は国立ということになって、すぐに国の管理の規則とぶつかってしまおう。そういうような面もあるんじゃないでしょうか。

寺中 そういうことももちろんあります。いま栗原さんがおっしゃったように、現在の興行界のやり方は、どんぶり勘定式で、だいたい文書による契約を交わすとか、文字で書いてどうかするという、そういうことはほとんどやらないんだ。非常に秘密主義で何百万円の金を渡したりするのに、契約書ひとつ書かないんだからね。そういうことだから、もし中にはいるものが、その気になって、金

ことですが、そういうった、まるで大名みたいな封建的な環境で生活している。そういう生活させておかなければほんとうの芝居はできないなんていう人もあるのですが、ぼくはそんなことはないと思えますがね。

栗原 国立劇場が最初つくられる時に予算が組まれましたね。その予算と現在きている予算というのは、どうい違いがあるのか。

寺中 まだ始まったばかりで、四十一年度と四十二年度と二つしかありませんし、四十一年度は公演を四か月しかやっておりませんから、いわば試験的な予算で今度初めて一年度の予算を組んだわけです。それで補助金としてはだいたい三億九千万円ぐらいで、全体の三割五分ぐらいの補助率です。中には歌舞伎座と同じことをやっています。中には補助金をもらわなければやれないなんていうのはおかしいというふうに見える人もあるかもしれませんが、一日に五千人分の収入があるわけですよ。国立劇場は一部制で千七百八、三分の一です。そして仕込みにかかる金はだいたい同じくらいかかるのです。役者に払う金も、大道具に払う金も……。そういう点まで非常

に苦しいわけですよ。そのために補助金が必要なんです。二部制のやり方というのは、これは正常だと思っただけは大間違いで、役者を使い過ぎる。役者の人権じゅうりんだという言い方もできるでしょう。いったい、昼の日なかに芝居をやって、昼のほうがお客がたくさんくるといふような状態がおかしいんだな。とにかく昼はみんなの働く時間です。そして働く時間が済んでから芝居を見ようというのが当然なんです。土曜日などのマチネーというのがあるけれども、どの国だって毎日毎日の十一時から芝居をしている国なんてないですよ。だから、正常なやり方をしようと思うと、どうしても補助金が必要なんです。それを歌舞伎座だって補助金なしでもうけてやっているじゃないかというけれどもあのやり方が間違っているんですよ。

栗原 国立劇場は貸し劇場もやるんですよ。貸し賃なんか安くして、ほんとうのいい芝居のために開放するとか、一年間のうちに二週間でもいいから、これを子どもたちのために開放してやるとかいった方法はないものでしょうか。いまおっしゃったように外国へ行ったら日曜なんか芝居をやっていませんね。日本では宗教的な意味はないけれども、

ウィークデーだけやって役者の酷使を避けようとか、何か国立劇場であるがゆえにほかの劇場の運営とは違うといった面が、打ち出されてもいいんじゃないですか。

寺中 それは予算の範囲内で、できるだけこのことはしているつもりなんです。まず一部制というものを貫きとおすという事は、経済的には非常に困るわけですが、国立劇場ではそれをやっているわけです。そんな無理をせずに、昼やればいいじゃないですかと、相当の関係者がみんな忠告してくれるけれども、それは昼さえやれば何も苦勞はないのですが、それだけは絶対だめだといって、がんばっていますね。

それからもう一つの点はけいこです。けいこも役者というのは芝居のくろうとなんだから、二、三日もけいこすればそれで芝居ができる。これができないのは役者じゃないという観念があります。しかし、演出者もなくて二、三日のけいこで、満足な芝居ができるわけはないですよ。いま国立劇場では六日を初日にして、少なくとも舞台げいこを中心に、一週間はできるようにしている。その前に脚本は一月、二か月前に渡っていますから、そういう点も商業劇場とは相当違うと思

ありますけれども、日本では将来の構想は別として、現在では県民会館とか、市民会館とかいう公立の施設がほとんど充実している。ところで、これで問題点があるのは、いわゆる県民会館、市民会館というのは知事部局、市長部局の所管が多いのです。芸術文化の振興というのは本来法律的に言えば、教育委員会が所管すべき事項なんです。しかし教育委員会というのには教育が相当なウェイトを占めてやっているので、結局、熱心な知事、市長のおられるところでは、知事部局、市長部局で、こういう施設をつくったり、あるいは芸術関係のことをやったりしている。

たとえば京都では、京都市に文化局があって、京都府には京都市に文化局があり、京都市交響楽団を持っています。

そういうことで文化会館や県民会館は全国に相当整備されてきましたが、その所管は知事部局のために、文部省とつながらない。しかし、中味としては芸術文化の振興の拠点である。だから所管は別だけれども、内容的には大いに文部省の指導も仰がなければならぬ。教育委員会所管のものも、知事部局所管のものも相互に連携をもっていきたいというような声が大んだん高まってきて、いま全

国公立文化施設協議会とか、あるいは私立のものも含めて全国ホール協会とかいう組織ができてきた。そういう組織の要望として中央に国立劇場ができたのだから、これを中心として全国が連携していく。公立施設のあり方として、いまさっきの管理の問題の研究にしても、そのほか単に貸し小屋じゃなしに、自主的にいろいろ行事を主催するということにならうかというような声もあるんです。

寺中 これはほくらのほうからもお願いしたいと思っただけですが、この夏に、公立文化施設協議会で勘三郎一座がだいぶ公演をやりましたね。あれは非常に成功だったと思うんですけれども、とにかくそういうことは大いに盛んにしなければいけない。それについては国立劇場が専属劇団を持っていて、そしてそういう協議会と連携をとって、劇団をまわすというようなことを、ぜひやらなければならぬんです。

いまは多少遠慮して、専属劇団をつくってはおけませんけれども、これは将来は必ずできるでしょうが、かりに専属劇団をもたない現状でも国立劇場が役者をチャーターして、地方にまわすほうがもっとスムーズな、もっ

うんだ。というのは、歌舞伎座の初日、二日目というのはあれは本番じゃなくてけいこを見ているんだといつてもいい。国立劇場は絶対に黒子のプロンプターはつけなくて初日から本物の芝居をやっているわけなんです。そのようにけいこ日数を多くとっていることだって、経営的には非常に不利ですけども、それを貫いています。

栗原 それを今度は東京の子どもだけじゃなくて、全国の修学旅行の高校生などにも、国立劇場としての開放をね。

国立劇場と地方文化施設との提携

司会 国立劇場ができた時に、国民の劇場、国がつくった劇場というならば、東京だけじゃなくて、もっと地方にも国立劇場をつくるべきだという声の一部にあったですね。外国の例を見ると、国立劇場がたくさんある国も

と効率的なやり方ができると思うんですよ。あれはどういう形で松竹と話をつけたのか知りませんが、とにかく松竹というのは役者です。変なあっせん料みたいなものをとりまして、相当稼ぎますからね。とにかく冗費が多いですよ。私たちは冗費も何もありません。ほんとうに実質的なやり方で俳優をまわして、そして地方でもやりやすいやり方を、その方から話があればやるつもりなんです。さっき話した例の「歌舞伎教室」あれも地方へまわせばという話がありますが、私どもそのつもりで、少なくとも大阪であればやってみようと思っただけです。大阪では大阪の役者を使って、二百円でやろうと思えばやれるんです。ああいうものは、一流の役者で一流の芸を見せなければだめだという人がありますが、それはそれに越したことはないかも知れませんが、一面若いこれからという役者のやるのを同年代の者が見て、お互いに鼓舞し合うところがある、またいいところなんです。それだからまた安くできるわけなんです。さっきも言ったように若い役者と大名人の役者とは、人によっては出演料が百倍以上も違うのですからね。

青少年への芸術普及

安達 文部省ではことしから青少年のための芸術劇場をはじめました。これは特別の劇場を建設するというのではなく、青少年のためにすぐれた芸能の実演に直接ふれさせ、芸術鑑賞の目を開かせ、情操のかん養に資するというのがねらいで、オペラ、新劇、能・狂言、文楽、落語、講談の五種目につきまして、中央で一回、地方で四回まわり総計二十五回の公演をし、全国で三万人の青少年が集まりました。これは非常に好評だったと思うんです。たとえばオペラにしても、生まれて初めて見たというような青少年が、感激の手紙をよこしました。宮沢さんにはそれについてのお話があると思いますけど……

宮沢 あれは公演した土地の人も喜んで、出かけた人も喜んでですよ。砂原美智子その他の歌手とか、演出者や指揮者も、いい仕事だったといっています。聴衆が熱心で、まじめで、生まれて初めて見たけどオペラとはこんなものかということ、よくわかって楽しかったという、そういう意味で成功だったんじゃないかと思えます。

な消極的な県と、どの種目でもよいからぜひ青少年のためにこういう機会をつくりたいという県とがありました。これによって県の消極性と積極性がわかったわけですが、その時にオペラと新劇に圧倒的に申し込みが多く、文楽、能・狂言、落語、講談というのは、どれも一県程度しかこなかった。しかし、これはブロックごとに送り込むわけで、東北地方にはオペラ、九州地方には能・狂言というふうにやったわけですね。

それで、感じたことですが、感想の手紙もきておりますし、地方の新聞にも書いてあります。たとえば文楽とか能・狂言で、初めはむずかしいだろうとか、老人が見るものだという程度に思ってきた青少年が、それを見て非常に感激して、やはり日本の伝統的な誇るべきものである。今日まで残っているよさを痛感したという青少年が非常に多いんです。文楽と能・狂言では特にそうだったんです。だから、県の担当者の段階では、オペラ、新劇と申し込んでくれるけれども、現場の青少年は能でも狂言でも、そこから非常に日本の芸術を感じとって得るところがあったということですから、県の担当者の立場というものは、もっと青少年の欲求とか、担当者の指導

それからもう一つは、地方の文化会館的な建物を、これからつくることに協力したいという話と関連して、オペラを東北へ持って行ってみせたことで、そこにきた教育関係者も学生も「今度、うちのほうでも建物を建てようと思っていたけれども、こんなにオーケストラがいるのでは、たしかに管弦楽の席をある程度大きくとっておかなければいけないというの、わかりました。なぜそんなに大きい場所をとらなければいけないのかと思っていましたが——」といったそうです。だから、そんなこと一つにしても、百聞一見で、実際に、当らなければわからないんですよ。オペラをもっといって実際にやってみて、あれは特に大オーケストラではないけれども、それだけの場所とさえ地方で建てる時は、いらないという考えで建てていたところがずいぶんあるんですね。口でいってもわからないが、実際に当たって初めて納得し、それで建てる上に非常に参考になったと喜んでるんです。やった人、見た人が感激したとか、感動しただけではなくて、建物一つ建てる上にまで役に立って有益だったと思います。

寺中 オーケストラビッドだけじゃなしに、楽屋が狭いし、舞台も脇がないでしよ性とかを考えなければならぬと思ったんです。

河北 その点ですけど、どうしてもただ希望をとりますと、やっぱり地方の場合だとマスコミの影響や何かで、先入主として入っているものがありますから、そこからの要求がどうしても出てくるんです。こういうふうな、大きな視野に立って芸術文化の育成、あるいはそうしたものの健全な発達を願う場合には、むしろすべてを見せたほうがいいと思うな。セットにしてやるのは、ちょっと押しつけがましいように見えますけれども、そのほうがほんとうの親切じゃないでしょうか。そうしないともとも知らないところでは興味もないですから要求もしない。要求しないところには送らないということで、いつまでたってもそこには健全な種子が出てこないから、私はむしろこれはセットにして、とにかく文化会館なんているのは全国にあるから、順番にまわしてすべてを与えたほうがいいと思います。

宮沢 おそらく希望をよれば、講談というのは一人でもやるのだから、自分のところでも呼べるという計算がいく。ところがオペラとなると、オーケストラも、コーラスもついで

う。だから非常に芝居がやりにくいですね。宮沢 天井が低く興行きなく脇がないホールが多いですね。上野の文化会館でもイタリアの連中なんか、あの舞台は装置が組みずらいとこぼすんですよ。それから舞台の上にバーが少ないから、つり道具が使えないわけですね。それだから場面転換がすばやくいかないわけです。だから、そんなことも、外観より実際にやる上から考えて建ててはいけない。いろいろな点で舞台裏の問題にまで及んで、オペラを地方に出したのは、役に立ったように、たいへんよかったですね。

司会 青少年芸術劇場はことしから始めた仕事で、趣旨はおわかりのように、一つは青少年の健全育成。もう一つは日本の芸術振興はもっと広い国民的基盤の上に発展させなければいけない。そのために地方の青少年にこういう本物を見る機会を与え、関心、理解を深めさせていかなければいけないということ。そういう二つの面があります。そこで全国各県へこの五種類について何を希望するかということをお知らせしたわけです。ことしは予算が決まるのが非常におくれました。前々から予定されていた仕事ではなかったもので、こしはよすを見てからにしようというふう

てくる。それから衣裳、装置、それでたいへんな金がかかるということは、だれだっけですか。たった一人の講談をやる人を呼ぶのはいくらか高くても予算が出せる。テレビでもまたたしめる。だからどうせやってくれるのなら、金がかかってやれそうもないものをと、まずそういうことからオペラや新劇あたりをとということにはあるんじゃないんですか。そういう経済的事情も、やはり計算にはいっているんじゃないですか。

栗原 各県に文化課ができるというような大きなことというのは、非常にいいと思います。いま課長が話された、窓口でそれを選ぶというふうな時に、窓口の人が広い立場でこういうものを選択しないんですよ。

たとえば狂言でも、いまの中学の教科書に狂言のない教科書はないんです。けれども見た子供は一人もいないんです。ところが窓口の人は自分の知っている範囲で選んでしまったりする。いままで窓口がはつきりしていなかったために、選択が常識的に思いつきふうに行なわれて、青少年にぜひ見せなくてはという積極的な姿勢がとれなかったんじゃないでしょうか。

地方の芸術文化活動の実態と問題点

司会 それから話題が少し変わりますけれども、アマチュアの地方劇団、楽団、コーラスの問題点といえますか、中央のものを地方へ持って行くということのほかに、地方自体の活動としての芸術なり、そういうものを盛んにするというには、どういうふうにしたらいいかという問題があるんじゃないかと思うんですが、どうでしょうか。栗原先生はいろいろ児童演劇とか、そういう面で地方に相当いらっしゃるんじゃないかと思うんですが……

栗原 児童演劇とか青年演劇などに関係して来ました。講習会では文部省のブロック別の講習会、これなんかもう十何年になりますか。これはかなり大きな影響を与えていると思います。そしていまはブロック別でなくて、県別みたいに小さく分けていかなくてはならん時期になってきていると思うんです。たとえば近畿なら近畿でやりましても、会場が奈良では奈良を中心にした人たちが集まるといったくあい、その県の人が多い。それは……

音楽とか、美術というものを感じていない教育を、あまりにやりすぎているという印象を受けますが……

宮沢 その音楽は「音にわれ苦しむ」という音我苦かもしれないけれども、でも、音に苦しんでいるのならまだいいけれど、音を知らないんですよ。教えている先生が知らないものもあるんですよ。かなり前に、何かの試験問題を見て驚いたんですけれど、「ロ短調ミサ」と「ブランデンブルグ協奏曲」と「G線上のアリア」の作曲者名と国籍を書けというんです。そこでヨハン・セバスチアン・バッハと書けば正解なわけでしょう。ところが「ロ短調ミサ」というのは、私も東京の音楽会は大震災前から聞いてるけれども、関東大震災はもうそろそろ五十年前ですよ。「ロ短調ミサ」を私が何回聞いてるかといったらほとんど毎日音楽会へいく人間だって、めったに聞かれない大作ですよ。それを地方の先生がそう容易に聞いているわけではないし、レコードでもおそらく全曲聞いたことがないだろうに、それが試験問題に出ているんですよ。

栗原 そういう教育を受けて社会に出たら、トタンに炭坑節になっちゃってね。

宮沢 そういうことですね。片方は実際歌

が困難だろうという理由もあるわけですね。

それと学んだことや自分たちの活動を、もっと地域的に生かしていこうという積極性があるといいますがね。すきもの同士がやっているというような調子では地域に受け入れられない。それから地方で劇団などをつくってやっている人たちが、自分たちの夢をはたそうといったふうな気持ちが先だって、地域に根づいて活動しようという、気持がうすい。少しうまいと、どこかに出て芝居をやるうかという傾向ね。旦那芸では、若者の演劇にはならない。

宮沢 音楽は逆の場合もあるんですよ。たとえばコーラスなんかは全国でやっていていへんさかんです。それからオーケストラも地方の好事家が集まってやっています。ところが名前が三つあっても、いざ演奏会をやる時は一方から、片方へかけ持ちで応援に行くような連中が多く、腕のいい人は団体の選手なみに渡り鳥も少なくない。実際のところ、西洋音楽関係のものは、地方と東京との格差がひどい。また同じ地方でもいい指導者がいる所と、そうでないところの差が大きい。それから、さっき狂言も見たことがないというお話が出たけれど学校の音楽教育というものを知らないんだから……

栗原 学生が仏像の指を折ったり、大事な場所らしく書きをしたり、美術品をだいにしなかつたり。もっと一般的な立場からの芸術を愛する気持ちを育ててはいけないのではないですか。

地方芸術文化活動の育成

安達 そういう地方のアマチュアの活動をどうやったらこれから盛んにできるかというんで、たとえば県が主催でそういう発表会をやる場合に、県も補助し、国も補助しというような公的な形にすると、見る人も見てくれるだろうし、聞いてくれるだろうし、やるほうももう少し、自分たちの仲間の好事家だけの問題でないようにならないかという気がします。地方の芸術文化活動の助成としてそういう面も考えていく必要があると思いますね。河北 すべての催しについていえますけれども、地方の文化会館式のところ、あるいは美術館でもそうだけれども、そういうところは、中央からまわすようなものと、それからその地区に即した仕事と、両方必ずやるように育てることが大事だと思いますね。放つて

も、東京のモデル校はすばらしいですよ。そういうところでは鑑賞と器楽、歌唱の演奏も自分で曲をつくる創作、つまり作曲のまねごとまで子どもにやらせている。

ところが、一歩地方へ行くと先生が指一本で、まだピアノをたたいてるようなところもある。だから、音楽の場合その格差をどうするかという問題がある。それから、また、鑑賞教材でこれだけはぜひというものも、教える先生が見たことも聞いたこともないものだから、知識だけで教えちゃうんですよ。先生が何か読んで教えてくれます。だから、音楽というのは音を楽しむとか、オペラを見て、そういうものから実際感銘を受けるということよりも、知識の試験みたいになってくる危険性も地方にはない。そういうことから音楽がきれいになるような子たちがあるんですよ。そのへんの問題はむしろ難しい問題だろうと思うんです。

栗原 そのへんからいいたら美術の問題なんかも同じじゃないですか。音楽はこのごろ「音が苦」と書くんぞどうですかね。高等学校の入学試験の問題なんか見てもびっくりしますね。なぜあんなことを知っておかなくてはならないか。知識として知っても、かたがたおくと中途はんばな……

安達 両々相まつということですね。美術展などでも県の展覧会というものがありませんから、そういうものもちゃんとしてやる。同時に中央のいいものをするというようにする。われわれとしても来年は、県が主催する芸術祭とか、展覧会とか、芸能発表とか、そういうものをもう少しきちんとやるために、国の補助もやっっていくべきじゃないかと思っています。

河北 そこで文化財保存的なことと、多少からむかもしれませんが、その土地でなければ見つかからないような、非常に特色のある文化なり伝統なりがありますね。だいたいいこうしたその土地特有のものというのは、土地の人は、わりと尊重しないことが多いものです。むしろよその土地の人がそれを尊重して、土地ではかえっていやがっているようなことが多い。こういうもので広い目で見てほんとうに大事だというふうなめやすがついたら、これをなくさないように、維持し

ていくように、補助することも大事だと思えますね。それはその土地の人に、わかるよう
でわからないことが非常に多いのです。この
意味でも一般的なものと、その土地の特殊な
ものと、両方を育成することが大事だと思
います。

安達 しかし、音楽や演劇に比べれば、美
術のほうの面でいえば、地方のレベルはそう
低いことはないでしょう。

河北 美術のほうはわりと早くから、いろ
いろなことに手をつけて発達して来ているか
ら……。

栗原 美術のほうでは個人的にすぐれた人
たちは、東京の展覧会に出すとか、できます
けれども、集団でやる場合に地方で一番困る
ことは、自分たちの発表の場がないというこ
とです。たとえばいまホール協会の話が出ま
したけれども、ホール協会の資料は、ホール
の維持費から割り出した賃借料でしょう。と
ころが専門劇団でもそうですが、児童劇団の
専門劇団あたりでも、一番負担がかかるのは
劇場費なんです。ましてアマチュアの人たち
がやる場合には、公共的無料でやれるとこ
ろが少ない。日本の場合には公共的と言っ
ても、資料をとられる。だから先ほどの人口何

とは惜しい。ウィーンあたりでは、いかによ
くあらゆるものが、観光団体まで、みんな一
緒になっちゃって、文化だけじゃないんです
よ。何もかもが一緒になって、美術展からス
ポーツ競技まで一緒になってやるでしょう。
ああやって総合的にやるようにしたら、ずい
ぶん効果的にいくと思うんです。いまはど
うもばらばらになっている。さっきのテレビ局
が六つあることを笑われたのと同じことにな
っている。

河北 しかし、これはある意味では、日本
の現代の特徴といえますか、各分野でそうい
う面が非常に多いですね。多いというのはむ
しろなおさなければならぬという意味も含め
てね。

宮沢 政党の派閥じゃない。

河北 とにかくバラバラにいろいろなもの
が出るというのが、非常に多いですね。いま
は美術館やなんかでも、これはわれわれのふ
だんタッチしていることですけれども、買い
上げなんかでも、ほうぼうで買っているわけ
です。国の機関の中だけでもいろいろの
機関でそれぞれに美術品を買っているわけ
です。これを一つに統一すれば、むだもすくな
いし、いいだろうと思うけれども、なかなか

万以上のところもそうだが、むしろ小さな農
村あたりでも、公民館的なものの拡充という
ことが、やはり大事ではないでしょうか。

安達 そうですね。公民館のほうは役所の
機構からいいますと、社会教育局のほうでや
っておるのですから、そういうものはそうい
うものとして大いにやる必要があるし、もう
ちょっと大がかりなものにわれわれのほうで
やるということになっております。

栗原 それからいま全国の青年大会あたり
で、演劇大会をやっていますね。これは四十
県以上が毎年参加しています。参加する人員
も六百人近くで、競技人口よりも多いくらい
です。県の予選を通過してきたこれだけ多く
の青年たちが舞台で発表しあうということ
は、世界にもないことだと思いますね。こう
いうことを十年もやっているけれども、案外
PRも足りないですね。そういう記事は新
聞もテレビも扱わない。あれだけの若者たち
が集まっても、演劇をともに楽しんでいるとい
うのに……。こういうふうなことは文部省あ
たりも、もっと積極的の助成していただいで
……。あれは管轄が違うのか、文部省でや
るだけじゃなくて……。

司会 青年大会の演劇部門は、いま実質的

そう簡単にいかない。国の機関同士でさえう
まく統一できないでいるくらいだから、それ
が東京都とか、文部省とか、NHKとかにな
ったら、なかなか統一整合ができないでし
ょうね。

宮沢 だからイギリスのアート・カウンシル
とか、アメリカのナショナル・カウンシル
式に、そういう協議会というものができた
ら、ぼくは非常にいいと思います。

たとえば、東京で藤原オペラが何かをやっ
たて、それと同じものを大阪でやる時は演
出はもとより何から何まで全然別で、訳詩ま
で違うんですよ。そんなことをやらないで訳
詩が一つに統一されていたら、歌い手だっ
てどれくらい楽だかわからない。労音はこの訳
詩、NHKはこれ、二期会はこれというよう
に訳詩がみんな違うんだから歌い手は覚え
れやしない。歌に気分が出てくると、前の訳
詩が出ちゃったりする。批評家は、文語と口
語と入りまじったおかしな訳詩はやめてくれ
と書くわけでしょう。実にそのへんの連絡が
悪い。

司会 それはだからどうすればいいんです
か。

宮沢 結局アート・カウンシル式の、何か

には文部省ですね。もちろん共催者は日本青
年館、それから日本青年団協議会です。芸能
関係は文部省がそうとう力を入れてやってい
ます。

寺中 青年大会そのものは体育局がやって
いるんですね。

司会 体育局が窓口ですが、芸能部門は文
化局です。

芸術文化施策の効率化

宮沢 いまの栗原さんの話とも関連性があ
ることなんだけれども、結局、そうやって演
劇なら演劇を熱心に地方の人たちがきてやっ
たりしている。そういうことはさっきいった
問題とやっぱり同じことなんです。文部省
の芸術祭と、東京都の芸術祭と、NHKで音
楽祭というのを別にやっていますね。だから
せつかくそういうものをやる、相当の力を持
っているところが、何か連絡を密にしてやっ
ていくような協議会のようなものをつくって
いき、そういうものをNHKでとって、それ
をテレビが何かで流してくればやったほう
だって、はりあいがあると思う。そして励み
にもなって、さらにやっっていくだろうと思
うんだけれど、とにかく連絡がないというこ

しかるべき機関ができて、そこでスタンダー
ド・リブレットをつくれれば、そういう問題は
解決されていくわけでしょう。現にドイツな
らドイツでも、一つ訳詩を覚えれば、それで
ほかの町のオペラハウスへ行っても、その訳
詩が通用するんだから楽だといっている歌手
がいますよ。

栗原 また青年大会ですが、あれほどの若
者の祭典をやっているのに、東京都民も知ら
ない。ジャーナリズムもさぼを向いてい
る。わずかに地方の新聞が、自分のところが
優勝したらそれを書きにくるといったぐらい
なことです。

オリンピッククラスの大きなポスターをベ
タペタはりまわしてもいいから、もっとPR
して関心をひくことが大事じゃないでしょ
うかね。もったいないんですよ。鹿児島、北海
道あたりからくるんですよ。

河北 文部省でやっている事業で、いろん
な意味でもったいない事業というのはたくさ
んありますね。もっとNHKなり、ジャーナ
リズムなりの力が加わったら、まちがいなく
効力を発揮するであろうと思われる仕事が大
くさんある。ところがなかなかそうはいかな
いのが、日本の情勢みたいですね。これはソ

ピエトとか東欧圏のような社会主義圏では、そういうものが一つになっていっているから、小さなことでもわりと効力を発揮するんです。

私はこの間、展覧会をソビエトへ持って行ってやった時、なかなか宣伝なんかしないものですか、こんなことではないって広報がでるのかと心配していたのですよ。ところが実際は伝達機関はその種類がなくて、一つの系統で、パツと強く出るものですから、文化省か何かから指示が行きますと、いっぺんに効き目があるわけです。だから簡単に聴率がい入んです。周知徹底がきわめて能率的のようでした。

宮沢 そういう点、確かに、社会主義国家というところは非常に周知徹底するんですね。

河北 簡単な機構で徹底できるんです。宮沢 それから社会主義国家でなくて、たとえばドイツなんかでも、シュツットガルトであるオペラをやっても、それが評判がよかったという、そのプロダクションを、近くの都市でそっくり引きさうけてしまふんです。そういうことをやるけれども、日本は、東京で評判がよくても、大阪じゃめったに見向きもしないでしよう。

宮沢 いまのお話、ほくも同感。というのは、しろうとで芸がないんだったら、それでじゅうぶんこなせる。やさしいものをやれば、それなりに楽しいから、お客ももつとつくんです。

よく地方でオーケストラをやっているから聞いてくれというんですが、しばしばとんでもない難しい大曲をやるんですよ。彼らの場合はこれをやりましたということが誇りなんだ。ところがそんなのがうまくできっこない。聞かされているほうはたいがいうんざりしちゃう。だから腕相応のものをきれいにうまくやってくれば、それでお客もふえ、発展すると思うんだけど、どうもだめですね。やっぱり何でも難曲、大曲、有名なものというのをやりがちやう。

栗原 アマチュアでないということを見せるために、専門家の演じたいものをまねしてやったりね。

アメリカの大学演劇などは、自分たちはアマチュアだ。しかしわれわれの精神というのが高いところに置いてあるんだ。技術的なアマチュアだ。だから自分たちは思いついてやろうじゃないか。たとえば「ハムレット」を

寺中 青年大会の演劇コンクールは、非常におもしろいし、せつかく地方から道具や何かを持ってきて、非常に意義もあるしいことなんだけれども、あれをしかしPRして、みんなに見てくれと言っても、それは惜しいけどなかなか見ませんよ。そうかといって客席をあけておくのはもったいないから、そんなことを言っちゃ悪いけど、老人ホームを呼んだらどうかと思うんだ。国立劇場も時々老人ホームを呼ぶんですよ。

栗原 あれは朝の九時から夜の七時か八時までやるんですから、ある時間はそうするのでもいいでしようね。ただ、せつかく老人ホームがやってきた時に、ちょうど、実験的なものをやっていたり、おもしろくないものに当たったりしたらつらいかもしれないなあ。それよりもどうですか。三日間、国立劇場を開放してやったら、地方の青年ははりますよ。国立劇場でやれるということになって。小劇場を三日間開放しませんか。

寺中 それは考えてもいいですよ。ほくだけじゃちょっと決められませんがね。宮沢 さっきお話が出たけれども、一部制がまあ当たりまえなんです。どこの国へ行っても一部制です。特別の場合、マチネーが

燕尾服を着てやる従来の形式にとらわれないう。そうするとプロドウェイあたりから見に行くんです。学生の着想のおもしろさを、むしろ、商売人のほうがまねをするといつたふうな形になっていくんですね。ところが、日本の場合は専門家の縮刷版を自分たちがつくろうとする。アマチュアの喜びというふうなものをも少し感じさせなくてはいけません。安達 いいアマチュアリズムということ、確立しなければいかんと思いますね。

栗原 そういうことで、大事なのは、各県あたりで審査員になるような人たちですね。この人たちが青年と文化、青年の活動ということをしつかりつかんだ上で臨むことですね。

たとえばその地方の方言で、たどたどしいけれども、その地方色を出しているようなものを持ってきている。ところが、それを出すと県での予選で落とされるというんですね。そんないなかのおれたちのやっているものを、東京の人たちにわかるはずはないというんだ。勝ち負けを意識して出てくるために、ほんとうの郷土からにじみ出たものを選ばない。私たちは、たとえば東北地区からきた

あるんだけれども、たとえばメトロポリタンオペラのマチネーは、ふだんは原語でやるが、初歩者向きに英語でやるというようなやり方をとっています。そうしてなじみのない人たちにもまずわからせ、親しませるというやり方でそれをやっています。プラハなんかへ行きますと、土曜日の午後などマチネーにして、青少年に自分の国の創作オペラに親しませるようなことをやっています。

地方芸術文化活動とアマチュアリズ

栗原 さっき局長のいわれた、地方の青年あるいは一般社会人の芸術活動というんでしょうか、そういうもので（これは日本特有なものかもわかりませんが）、アマチュア意識というのがないのですね。やっているとすぐ専門家風に錯覚しちゃって、だからアマチュアということばを非常にいやがりますね。私たちがアマチュア演劇連盟というのを横浜に置いて、全国的組織でやっているんですが、アマチュアといわれると、非常にこげんかかかるといったふうなところが、まみえられますね。外国の場合のようにアマチュアだということをかえって誇りにしてやること

芝居なんか、ドイツ語よりむずかしいという審査員もいますけれども、ことばはわからなくても、地域の中に根づいている迫力というのはわかります。したがって決してそれを審査の対象の中でどうするということはないんですよ。ところがぐる人自身は、東京の審査員に見てもらうんだからといった調子で、ちょっと観点の違った立場で送り出すのです。さっきの河北先生がいわれたように、演劇の場合も同じだと思います。いいものは東京から持っていきましよう。地域では地域の人たちの支持を得て育っていくといった方向が欲しいですね。何もまねごとをしたものでなくやはり自分たちの生きていくあかしというもの、舞台上で表現していくんだといったふうな、素朴な観点を、窓口の人たちとか、審査員とか、そういう人たちが持つてくれないと、発展しないと思いますね。

河北 一番通俗な言い方をすると、そういう基準を二つ立てておいたほうがいいと思うんですよ。いいというのはこっちはほう、悪いというのはこっちはほうと決めないで、これとこれがいいんだと二つ、先ほどの地域的な津軽弁なり何なりが出てくるそういうものがないんだということ、それから一般的に

非常にすぐれたもの、これもいいんだという、二重の基準です。それをどっちかにきめないと安心しないものだから、結局はつまらないことになって、どっちもだめになってしま

宮沢 どちらかにきめなければならぬというの、日本人の特性だと思っんですよ。たとえば、あるこのことに關して私は反対だと言つても、反対だと言つたことによつて、私がとたんに反動だとか、あるいは左翼だとかいわれるかも知れないんです。極端な例は、クラスメートが死んだ、それが左翼の人であった。ぼくが葬儀委員にクラスメートを代表してなつたとして、ほかに並んでいる人が左翼だったら、あいつは左翼だ、アカだとかるんですよ。その逆に右翼だったら、あいつはファッショだとかいわれちゃうんです。右とか左とか、どっちかにきめちゃうなければすまない。だからとにかく、すぐレッテルをはられる危険性がある。

河北 それで、すべての芸術品の判断に、必ず一方の基準だけに話を寄せてしまつては、すね。そうすると非常に大事なものがいつのまにか切り捨てられていく。その大事なものを

寺中 そういう流動コレクションも必要ですけれども、中央の関係も、たとえば日本の代表的な国宝だとか、何とかいうものが、みんなお寺なんかの所有になっていて、集まらないでしょう。博物館でいくらかいろいろなものを持っていきますけれども、これが日本の代表的なものだということ、外国人に見せようということになると、お寺をまわつてく

ださうということになってしまふ。あれをなんとかできないかと思つただけでも、お寺はなかなか手ばなさないと思つけどもね。

河北 以前はむしろ、博物館なり何なりに寄託するという方式で、だいたい博物館に寄つていたんです。奈良地区は奈良博、京都地区は京博というようにまとめてあったのが、戦後になって、お寺はみんな苦しくなり、観光客をひかなければならぬとなつたので、良いものはすべて取り返してしまつた。

宮沢 結局、宝物拝観券という入場料で財源をというので、博物館から回収してしまつて

宮沢 そうなんです。芸術というものは芝居でも、絵でもそうだらうけれども、こうでもあつていいし、また、こうであつてもいい。それぞれにその人なり、集団なりによつて、また別のよき、別の美しさというふうな、いろいろなものが見いだせれば、それもいいと思つてますよ。

美術の普及と美術館の役割

河北 それで、あんまりこまかく基準を立てるとわからなくなるから、一つこういうもの、もう一つはこういうものというふうな、二つぐらいに整理していくと思つてます。

それからさつき演劇のほうで、国立劇場あたりで、一つセットをつくつて各地をまわすような、そういうことを考えられるというところでしたけれども、美術のほうでも巡回展などをやっておられますけれども、私が一つ提案したいのは、全国の美術館のための代表コレクションをつくつて、そのコレクションは全国の各美術館の共有コレクションだといふにする。文部省の手で助成金などを出して、こういうものをつくつたら非常に能率よ

司会 ちょっと話が違いますけれども、日本にもだんだん美術館が整備されてきました。しかし、たとえばフランスだったら、ロダン美術館だとか、ブールデル美術館だとか、作家、作家の美術館がありまして、その作家の作品が必要な場合にはそこから作品を借りてくる。日本ではそういう美術館は皆無といつていい、どこも同じような中味を持つか、それさえも持てないという状態です。これは日本において美術館のあり方についての考え方がおかれているからですか。どういふことになるんですか。

河北 おかれているからということもありましようね。それであとで私もお願いしようと思つていたのですけれども、そういうふうな一般美術館と同時に、もう一ついまおっしゃつたような個人美術館が、みんな非常に苦しんでいるんですね。どこでもだいたい一般的な西洋美術の展覧会をやるような、あるいは新聞社の展覧会をやるようなところに人が行つて、そうじゃない、特殊な性格を持った美術館ははやらない。そういったところは経営にもきゅうきゅうしているんです。私はむしろ、そういう特色のある、しかも美質のある美術館について、何か援助してやること

くいくんじやないかと思つます。一つ一つの美術館は、どこもコレクションをつくるだけ力がないんです。全国にたくさん美術館が出てきたけど、さつきのお話じゃないが、建物はあるけれども何も力がない。それじゃ力をつけてといっても、一つの美術館ではとてもムリですから、むしろ全体で一本とか二本とかいふような……。

司会 それは展覧会内容を組み立てるといふことです。

河北 そういふことですね。

司会 それをまわして行く。

河北 そういふわけですね。コレクションとして大きいものをつくつて、セットの大きなものをまとめ、それがあちこちまわっているような、流動コレクションです。そういう発想でいつたら、わりあいに少ない額で各美術館のコレクションにあたるようなものが用意できるんじゃないかと思つます。いつだったか、ほうぼうの美術館とか、博物館の所蔵品を調査されて、借用する時の便宜を計るよふにという計画があつたけれども、今日ではどの美術館でも、だんだん貸さなくなつてきましたね。みんな自分のところで押さえて、ほかには貸さない方針を出すところが多

たいせつだと思ふ。日が当たらなくて、しかも中味のすぐれたようなものをとりあげて援助してやるというような方式が取られると、今日のおくれたひずみというものも、やや是正することができるとも思ふんじゃないかという気がします。

司会 地方で美術館ができれば貸館になるのか、作品を収集所蔵して展示するようにするのか。といつてどこもかしこも同じようなものになるのもむだだし、だいいち、じゅうぶんな作品なんてとても持てないだらうし。だから、地方の美術館といふのはどういふものを持てばよいのかということが問題になるのですが……。

河北 原則的にいえば、その土地の作家のものはその土地の美術館が主として持つという方式が、いいと思つますね。たとえば、この間もブリヂストン美術館で石橋さんにそういう話をしましたけれども、九州の石橋美術館では、九州出身の作家の代表的なものを集める。あそこへ行けば、ひととおりに見られるというぐらゐにしておく。また一般的なもの東京のブリヂストン美術館で集める。そういう方式で、特別大きな美術館は別として、そ

うじゃない美術館の場合は、その土地の作家のもの、その土地にかかわりのあるものを集めるという方式でいったほうが、コレクションとしてスジが通ると思います。ただし、催しとしては、それだけではおそろくダメで、それは別に考えなくてはならない。

司会 催しものは、さっきの中央からいくものとか、そういうもので飾り、そこ自身はそのものを持っているという有機的な美術館行政というか、美術館組織ができていけばいいわけですね。

中央の芸術振興

司会 だいぶ、地方と中央の格差があるということ、地方の美術振興ということとお話を伺いましたが、中央の芸術振興ということについても、いろいろお話を伺いたいと思います。

文部省では芸術祭は昭和二十一年からやっております。また年間の芸術の各分野でいろいろいい仕事をされた方に、芸術選奨の文部大臣賞をさし上げる。ことしからは新人賞も新しく設定したとか、あるいは功労のある芸術家を優遇する措置として日本芸術院を設置しているとか、いろいろ仕事もいたしておりますけれども、中央で現在どういうことが問題であり、どういふことをすべきかというようなことを、お話しただければと思います。

宮沢 ことに作曲の場合、一回演奏された

つきりじゃしょうがない。やはり楽譜が出版されていけば、その楽譜があることで、外国にもそれをやることのできる。放送はともかく、レコードにもならない、楽譜にもならないのでは、後に残りにくい。何とかこれから考えていかなくてはと思います。

栗原 それと、せっかく国がやるんですから、予算をもう少しとってくださいって、もっと賞を受けた人たちが実質的にも喜べるようなぐあいになっていけるといいんじゃないか。それともう一つは、参加する人たちの基準というか、もう少し厳格な形でほんとうの一流なものを競わせるといったふうなものにならないでしょうかね。

安達 芸術祭の参加公演の問題で、参加に値いするようなものに限るべきだという声が強くなりことしから基準に従って、基準以上のものをやっていたらどうかというようにしたわけですね。せっかくやりたいのにやらせてくれないというような不満も出てきておるんです。

宮沢 私は、ことしは音楽の審査員をやっていないからはっきりいえるんですが、音楽は最近よくなったけれどもある時期には、一流

術家を優遇する措置として日本芸術院を設置しているとか、いろいろ仕事もいたしておりますけれども、中央で現在どういふことが問題であり、どういふことをすべきかというようなことを、お話しただければと思います。

安達 新しい施策として、ことしから芸術家の在外研修というので、将来が期待されるような新進の芸術家を、ヨーロッパなりアメリカに、一年間勉強させるというようなことと始めたわけですが、人数はまだ四人というところで、たいへん少ないんですけれども将来はこの人数をうんとふやしていきたいと思っています。

宮沢 真先に口火を切って失礼ですけれども、文部省でことに始めておやりになったこと、みんなけっこうなこと、趣旨として今後ともどんどん盛んにおやりになったらいいと思うんですが問題なのはさっきから何度も言っていることだがなんとか文部省と、東京都や、NHKその他、いろいろなところが力を合わせてできないものかという気がするんです。たとえば文部省の芸術祭で大臣賞をもらったというものはレコードになり、楽譜になり、その前にまず大々的に放送されるとい

の人は、変なのが賞をとって、自分がとれなければ恥ずかしいからか、出ないことがあったんです。最近、だいぶ変わってきましたけれど、そういう事実も一面においてまだあるんです。それであんまり参加がなくても困るから少し甘くして参加を認めるとなると、芸はパツとしないが、ばかに熱心なのが、毎年出てくるんです。そうすると今度は、あれが芸術祭か、ひどいものだ。何が芸術祭だというようなことになって、審査員も苦勞し、文部省もいやな思いをすることになると思うんです。でも、その点もかなり改まってきたように思うんですが……

安達 あるいは、たとえば春と秋の二回にして、春のほうは新人の発表に、秋は芸術の鑑賞にそれぞれ重点をかえていくという方法も考えられる。新進の出る機会も与えたい、それからレベルも維持したいという二つの要求をいっぺんに満たそうとするから、そこに無理があるのでないですかね。

宮沢 そうですね。それに東京都で芸術祭を別にやっているのではお混乱し、ややこしくなっちゃうんですよ。

栗原 それからいまの春秋に分けるなら、せめて冬なら冬は、たとえば大衆芸能的なもの

うようなことになれば、ずいぶんいいと思う、そういう点どうも惜しい。それぞれ別々な立場で、自分たちの予算でおやりになるのはけっこうだけれども、別々にやるのが悪いというんじゃないか、せっかく文部大臣賞をとったようなものが新聞にのっただけで終わるのが残念な気がする。楽譜が出れば、あちこちでもやられるだろうしうまく演奏されたものは、録音を外国の放送局に配られればいい。そういう全体の連絡があれば、ただ賞をもらっただけじゃなくて、自分が骨を折ってやった仕事で、いろいろな方面から広く認められる機会ができ、たいへんいいと思うんです。いままでもうそういう点で、バラバラなんです。

安達 そういふ面で、従来やってきましたテレビなり、ラジオの台本募集ですか、今度からはNHKと共同で、賞をとったのはNHKで必ず放送するということになりました。それから来年、いろいろ明治百年を記念して芸術祭の特別公演をしたいと思っておりますが、できるものは、国立劇場と共催をやっていく。そんなこともやっていますし、NHKとの共同体制などもNHKと相談して今後もっと促進していきたいと思っております。

のは別にする。文部省の考えている芸術とは何か。漫才まではいっちゃって、漫才を入れたら次の年も漫才を何かの形で表彰しなくてはいかんというようになる。落語でも漫才でもこれからはいままでもらった人以外に見つけれたら困難になると思うんですよ。だから大衆芸能というのは季節をはなして、ほんとうに芸術だと認めるのは秋なら秋、新人は春なら春、大衆芸能はいつというふうに分けると、はっきりするかもわかりませんね。だんだん広がりてきちゃったんですよ。

宮沢 そして分野がやたらと広がっちゃったでしょう。何でも芸術祭参加になっちゃうから、そうなるよ、ああいうのと同列では、となって、真にいいところが出ないということにもなるんですよ。

司会 何でもかんでもいいですが、たとえば花火が芸術祭に参加したいと希望してきただけがあったんですよ。そこまですると……(笑)

安達 芸術祭はこととして二十二回目になります。日本の芸能の向上と普及にすぐ役にきたかと思えますね。それにしてもいろいろな批判なり意見なりもあることですから、

ここで芸術祭のあり方を再検討してよりよいものに改善し、充実していく方策を考えてみる時期にきているように思います。

新人芸術家の育成と団体助成

寺中 中央芸術振興ということになると、いまのような芸術祭とか、あるいはコンクールとか、賞を出すとかいう問題になります。何とか賞を出すということもけっこうですが、ほかにやるべきことがあります。これは歌舞伎の面だけのことかもしれないが、歌舞伎の勉強会がたくさんあるんですよ。木の芽会、荒磯会とか、つまり若い俳優が中心になってやる……。これは劇場を借りて、自分だけのお客さんと呼んでやるんで、せいぜい二日か、三日ぐらいしかやれない。ところが芝居をやるというのは経済的にもたいへんですから、やりたくてもやれない。だいたい芝居の興行というのは商業ベースでやることですから、普通よく売れる役者を出すだけで、埋すもれた下積みのひとは全然役がつくこともなければ、芝居をやることもできないというふうな事情になります。そこでそういう勉強会をコンクールじゃないけれども、並

らうと思えばやれるんですから、その助成のしかたが非常にむずかしいと思うんです。しかし、ぼくは助成は絶対必要だと思うんだ。せっかく助成をしようという、そういうことで官僚が進出するのはけしからんというようなことを、非常にいう人もありますが、そういう雑音はぬきにしても、やっぱりこれは大いに公平な立場で、そういう内政干渉的なことはいっさいぬきにしたい、ほんとうに能率の上がる助成をするということが、やはり芸術振興の中心になっていくんで、早い話がルネッサンス時代に非常に名画ができ、りっぱな美術が栄えたのも、やっぱりそれを注文する教会などが金を出したからできたんでそれがなかったら何もできなかったわけですよ。そういう統制にならないように、じょうずに助成することが必要ですね。

宮沢 それは、注文と締切がなかったら、いま世界に残っている名作の何分の一かは生まれていなかったらうという名句と同じだと思ふんですよ。

いわゆる文化人の中には、ソ連ではあらゆる芸術部門に國家が金を出しているとか、フランスではオペラ歌手はみんな国立劇場歌手といつて、こういう待遇をもらっているとか

べてやらせる。八月はだいたい、劇場があいているから、役者もだいたい一般劇場は休みですから、この八月を青年歌舞伎祭ということにして、そしてそういう勉強会をやりやすいようにしてやる。小屋代を安くしてやるというぐらいでは追いつかないので、いまも話したとおり、二日や三日でやる短期興行は、何といても舞台費が非常にかかるんですが、それに二日や三日分の入場収入では何程にもなりません、そこで収入を半分半分に別けて劇場側は劇場費と舞台費と、それから宣伝費を出す。劇団側は文芸費と出演費を出す。出演費というのは、自分らの芝居ですから中心になる連中はただ働きですが、地方の人に払う金ということになります。そういうやり方にするれば勉強会の奨励になると思うので、いま計画しているんですがね。

そういう機会に若い人が、いままでやったこともないような大物に取り組んで勉強することができると。まだ若いですから芸は未熟でしょうが、国立劇場でも応援して、お客のほうも大いに呼んでやるというようなことにすれば勉強会が盛んになっていいんじゃないかというわけなんです。がね。

安達 ほかの分野のものにもそういうこと

いうが、それでは、國家が藝術に金を出せば出すで、今度は、金を出して文化統制の恐れがあるというそのくせ出さなきゃ、日本は芸術文化に理解がなく、何もしないという。だからなかなかむずかしいですよ、そのへんのところはね。

河北 しかし、全体としては助成金はたくさん出されたほうがいいと思います。間違いないと思いますよ。

宮沢 私もそう思います。

栗原 それから現実にとえば俳優座の例をとると、俳優座の衛星劇団で、あそこを卒業した人たちがみんな小さな劇団をやっています。やっぱり発表の場がないんですね。小劇団をつくっている人たちの中には意欲を持っているものが多い。こういう人たちのうちから、やっぱり次の時代を背負う人たちも出てくると思ふんです。逆にいえば、テレビに反抗し、ラジオに反抗し、しかも舞台一途にこういうとしながら、舞台の機会を持ってないという人たちに何か場を与えることによって、國が登竜の門を開いてやるというような試みがあるといふんですがね。さっきから局長がおっしゃったように、春にはそういうふうなものが何かの形でやられるということになりま

はあります。

栗原 もっと新人のほうに目を向けるべきですね。彼らは時間的にも経済的にも苦しいんですからね。それに何とか養成に力を貸すというのは、やはり芸術振興策の長い目での、特にお役所できなくてはいけない一つの仕事になるんじゃないでしょうか。たとえばいままで新劇あたりでは養成機関があった。俳優座が十六年間やったのに、各種学校としても認定されない。あの学校に行っている生徒たちは定期券も買えなかった。養成機関というのは質がいろいろありますから、どこをどうというわけにはいかんけれど、新人たちがいま海外派遣で四人の方が選ばれましたね。ああいうふうな形と同時に、海外までいけな

いにしても、新人たちの公演などに対する援助というものがあると、非常にいいじゃないかと思ふます。

寺中 せっかくの補助金なり、助成金があるのなら、それをしょうずに使うということが必要ですね。次の問題にはいるかもしれないけれども、いわゆる団体助成、あるいは図書館補助金というものは、ともすると世間から見ると、それこそ演劇統制だとか何とかいわれがちだし、また補助金を種にしてそれをや

すとありがたいですね。

宮沢 その点が音楽と違うわけですね。音楽は、たとえばピアノやバイオリンや声楽は、内外にいくともコンクールがあるし、指揮にしたって、コンクールがありますよ。そのコンクールも非常にいろいろな形のものがあるでしょう。またNHKのオーディションもあるし、上野の文化会館や文化放送や民音や労音もコンクールをやり、器楽合奏から吹奏楽、合唱など、みんなコンクールがある。だからわりあいと機会はあるわけですね。

栗原 それと、最近の傾向として三十人劇場、五十人劇場という劇場が非常にあるんです。昨年、ブラジルへ行ってきましたけれども、外国あたりでも非常にそういう小さな、百人以内のところでも正踏的なものを守っているところがある。ところがそういうものは商業主義から流されてしまう。いま東京にも去年からの新しい現象として、そういう小劇団が一定のところを根域にしてやっていますよ。こういう人たちにも何か援助の手をのべるのいいと思ふます。この人たちは専門としてやっていますから、ほんとうの新人という形の対象にしたいと思ふんですよ。

安達 河北さん、美術の関係ではどうか。これは一番古い歴史を持っていますからね。

文化局と文化財保護委員会

河北 古い歴史を持っているし、いろいろと国の助成機関がたくさんできているから、ほかの分野よりは恵まれていると思いますけれども、ただ、いつも言っていることで、言ってもなかなかできそうもないと思われることで、一番大きいのは、中央の問題として私はやはり文化財保護委員会の問題だと思いませんね。文化財保護委員会と文化局の問題は、やっぱりもう少しまともに考えなければならぬと思いますね。

寺中 これはどうしても統合しなければいけないと思いますよ。これはこんなところで言ってみたってしょうがないかもしれないが、文化財というものは古いものを保存するんだ、芸術とか、文化とか、宗教とかということとは関係ないような、ただ古いものだけを取り扱うんだという考えではだめですね。

河北 その下に、たとえば国立劇場だって

Kと共催ということ……。

宮沢 それはちゃんとあとへビデオも残るし、録音テープも残るし……。

河北 私のほうでも、今度新しい建物が出来たら、オリンピックのほかにアジア大会があるごとく、アジアの国々を招待する国際展を、近代美術館で何とか開くようにもっていきたいと考えているんですよ。いまのところでは舞台が狭いから何んですが、ぜひそれは実現したい。いまのと同じような発想になりますけれども、近くの国々が集まることによつて、おたがいに非常な刺激を与えるでしょうし、またわれわれとしても違った参考が得られると思います。

栗原 商業ベースでいきます、大阪のフェスティバルみたいに、ヨーロッパとか、アメリカとか、そういうもので、案外近くの国々の民族のそういうものに接するということは、非常に少ないんですよ。

宮沢 実際をいうと、比較音楽学の面からいえば、近隣の国のもののほうが興味があるんです。

河北 大事です。そしてわれわれはアジア型の当然誇るべき特色を持っているながら、それが刺激されないで埋れている面があるんで

文化財系統でしょう。それから博物館というものがあるでしょう。ところが博物館やなんかと、われわれの美術館とはほんとうは兄弟関係でして、しかも実際遠いイトコぐらいいかならない。どうもそのへんがスッカリしないので、購入にしても、人事、運営その他にしてもぐあいのわるいところがありますね。

宮沢 別になつていっているのがおかしいんですよ。

司会 それは一歩ずつの前進で。文化局ができた当初その局構成の企画に参加して、理想的文化局を夢みたんですが、結局これまである文化関係課が集まったにすぎない形になりました。だから、たとえば国語課にしても、宗務課にしても文化局にはいるべきかどうかという問題もあるし、また、これらの課は文化局にはいったからこれまでより変わったということじゃない。結局文化局は、芸術文化の振興を期待されて、出来たのだから、大きくならなければならないところは、芸術文化のところというので、芸術課を発展させ、二つに分け文化課が新設されたと思うんです。だから文化局はこれまでであったものが集まったにすぎません。もっと根本的に文化財

す。そういうのが触発されて自覚されてくる面があると思うんです。

宮沢 それは非常にいいですね。文部省の中に国際文化課がありますが、あれと外務省とは、何か連絡はあるのですか。

安達 連絡はもちろんあります。一応の区分は要するに対外文化宣伝は外務省、こちらへ入れるというのは文部省だと、大きく区分けしてありますけど、外務省にはその団体として国際文化振興会というものがあってやることになっていますが、実際問題になるとやや混線してきましたね。ただ、その面ではこの前国際芸術家センターの民族芸能、それを非常に現代化して見やすくして持って行ったんですが、これは非常に評判がよかったですね。来年はあれを東欧へ持って行きたいとかいう話が出ていますね。

いまのフェスティバルの話に関連して、外国からいろいろきて、そのために国内のものが育たないんじゃないか。公演の機会を奪われるんじゃないかということがありますが、そういう点はどうでしょうか。むずかしい問題ですが……。

宮沢 実はこの間から、われわれは数回、上野でクラシック音楽を振興する会というの

との関係とか、国際交流を考えねばならぬと思います。だから、それはいま、一歩出発したところですね。

河北 それが一番の課題ですね。

国際文化交流

栗原 国際交流の問題で、たとえば一昨々年度、朝鮮のソウルに新協劇団という古い劇団があります。日本の一流劇団と比べても遜色がないんですよ。この連中が日本にこようとしたのに、条件を聞いてみたらこつかいがわずかに一万円です。それでも民間でやろうとすれば来れない。東南アジアかどこかの国を招待する口火を切っていたら、おそろく五百万円くらいでもできると思うんですよ。朝鮮から飛行機で来たところで十万円ですから、劇団が三十人きて三百万円。来さへすればその国の連中が待ちかまえていて応援してくれる。何かそういう口火を切つてどこかを呼んでもいいじゃないでしょうか。

安達 来年、明治百年だということで、アジア民族芸能祭というのをやろうかと思つていて。先ほど宮沢さんがおっしゃったように、文部省だけではできないということ、NH

をもつて、数時間ずつ協議をしています。私も呼びかけ人の一人として出ているわけですが、けれど、いろいろな意見もあります。しかし、外来にくるなというわけにはいかないうけれど、実際に東京でいま音楽会があれだけやられて、一晩に鑑賞団体も入れると六つも七つも、どうかすると十近くあることがあるんですよ。そうなればお客は分散しますよ。そのくせ、その中で、プレイガイドへ切符を出したら売れるような音楽会がいくつあるかという、そうなんです。一種の温習会めいたものが多いのと、それからリサイタルをやりましたという実績をつくるためにやっているようなものもあるんで。だから入りは少なくても、そんなのはむりにやらなくても、いいと思うんです。でも当人にする、そういうものがあれば勉強するし、もう一つは弟子を教えている先生というのはやっぱりやりたい。自分だけでなく弟子も一緒に出す。踊りの会なんか、先生は最後にちょっと出るぐらいのものがあつていい。

栗原 外国からくる芸術家の問題では、やはり音楽の問題が一番大きいですよ。演劇なんかの場合は非常にめずらしいものですか

ら、これは大いにきてほしいぐらいなんです
が……。

安達 オペラなんか、そんなにこられると
われわれの演奏を見てくれない。高いのを出
されたら見る人の財布の金がなくなっちゃう
う。

宮沢 そういう声もありますね。日本のオ
ペラ歌手も、もっと地方へ出てやることも考
えてもいいし、それこそさっきの話じゃない
けれど、自分たちの手に負えるものをうまく
楽しくやるということをやってもいい。そう
でなくて、日本のオペラ団は、やっぱり親類
縁者、友人知人に切符を売って、どうせ自分
たちが切符は売らんだからというところか
ら、はね上がったものを意欲的にやるんです
よ。いわゆる商業ベースになんか全然のらな
いというか、ほとんどフリーのお客がこない
むづかしい大作とか、わかりにくい現代物を
やってみたり、それは自分たちの研究発表な
らいいですよ。研究発表は研究発表できちん
とやって、普通にプロの公演として成り立つ
ようなものは、客がくるだけの魅力があるも
のを、自分たちの技量と見合せて、りっぱに
やること。ただ、これをやりまじったといいた
いためには、意外なものにとびつくというんで

なく、ゼニをとれる魅力あるものをやればい
いんじゃないかと思えます。意あまって力た
らず式か、一丁あがり式の安易なものかでは
困る。ほんとうに町のブイガイドで勝負して
いれば、そんなことは言っていられない。先
生で生活し、オペラで損をするのに慣れすぎ
た感じがある。

司会 先ほどのお話で、青少年芸術劇場の
効果として地方へいろいろな芸術家が行っ
て、むしろそういう人びとにも良い結果をも
たらせたいということでしたが、このごろそ
れぞれの分野で専門家が結集して法人がつく
られていますが、それらの法人が、有益な仕
事をやっていかななくてはならないということ
で、たとえばこの間も日本演奏連盟が地方で
セミナーをやりましたし、児童文芸家協会も
講習会をやりました。先日も高崎で、高崎音
楽祭の時にやはり講習会的なものをやりまし
た。中央の芸術家が地方へ行って後進の指
導、新人の育成をやり、そしてまた自分らの
やるべき仕事だという自覚を持ち、中央の団
体の強化ということも相まって、中央と地
方の連携がよくなってきましたね。

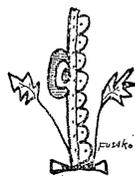
宮沢 たいへんけっこうだと思うんです
が、一番お膝もとの、何回でも云いますが、

東京都、NHK、文部省が緊密になれば望ま
しいということですね。

司会 中央はもちろん地方の芸術振興もや
らなければならぬし、東南アジアにも仕事
が広がってゆくと、芸術振興の仕事は山積し
ていきますね。

河北 その次はどうしても文化省になっ
てもらわなければいけないと思いますよ。

司会 それでは、長時間どうもありがとう
ございました。



編集後記

▽文部省に沿ったいちよう並木も、今や黄金色に染まり、落葉が街路をいろどり、汚れた東京を一時忘れさせるこのごろですが、秋は芸術・文化のシーズンということで、本号は、芸術・文化の問題を特集いたしました。

▽文化の日を中心に、全国的に催されている芸術祭、文化祭等の行事やその活動は年々多彩になり、また、はでになってきております。

▽民族のレベル測定の指標がそのもつ文化度であり、芸術への関心の高さであるとすれば、今日のようない見はなやかにさえみえる文化・芸術活動に、どのような問題点があり、それに対してどのような

な方策をたててゆくべきかについて、考えなければならぬ時期にきているといえましょう。

▽まず、巻頭では、浦松佐美太郎先生に、日本文化について、ひろい視野から論述していただきまし。有益な示唆が与えられているものと思えます。つづいて、音楽、美術、演劇の各専門の方々らびに国立劇場理事長、文化局長にお集まりいただき、座談会を開きました。それぞれの立場から芸術文化の振興に対する要請について縦横に論じあっていただきましたので、ここから多くの考える材料と今後のわが国における芸術文化振興のよりよい方向をさし示していただけだものと思えます。

著作権者 文 部 省

昭和42年11月5日 印刷
昭和42年11月10日 発行

発行者 株式会社 帝国地方行政学会
小川平二
印刷所 株式会社 行政学会印刷所
営業所 株式会社 帝国地方行政学会
東京都新宿区西五軒町 52番地
電話 東京(268) 2141 (代表)
振替口座 東京10,000番

定価 70円(〒6円)
年間購読料 840円

* 一年分前金の場合は、送料は当社負担でお送りします。
* ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申しあげます。なお、購読の申し込みは、直接営業所またはよりの書店にお願いします。